

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 朝鮮時代後期中国語教科書のハングル音注における濃音表記 sg と ss の研究—『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』『学清』『華音撮要』を対象に—

申請者氏名 LU JINGHAN

朝鮮半島は中国と地理的に隣接しており、古くから交流が盛んであった。そのため、朝鮮半島では古くから漢語教育が極めて重視されてきた。特に朝鮮時代に入って「事大」政策の確立に伴い、漢語教育と学習は全盛期を迎えたといえる。この時期には多くの漢語資料が編纂され、特に『訓民正音』の創制からは、漢語の実際の発音をハングルで記録した「諺解本」教科書が登場した。これら漢字に対してのハングル音注は、当時の漢語音を直接に反映したものとみなすことができ、漢語音韻の研究にとって極めて貴重かつ独自の価値を有している。汪榮宝(1923)は、「夫古之聲音既不可得而聞，而文字又不足以相印，則慾解此疑問者，惟有從他國之記音文字中求其與中國古音有關者而取為旁證而已」と述べている。

朝鮮人がハングルを用いて記録した漢語の発音は非常に高い参考価値を有しているが、編纂者が中国語の母語話者ではないため、その音注には中国語の音韻規則と一致しない現象も見られる。その代表的な例の一つとして、朝鮮時代後期の漢語教科書に見られる「濃音表記」がある。濃音とは平音に対して、発音時に喉の緊張と力がより強くかかる子音を指す。このような特殊な表記形式は学界の注目を集めてきた。しかし、既存の研究は対象を特定の教科書に限定した分析が多く、同時期の資料間の比較研究はほとんど行われていない。また、朝鮮時代後期に対する音韻的な研究は主に音節を主な分析単位として扱っており、文や語などの単位での検討は少ない。

このような背景のもと、本稿では、成立時期が近く、音韻体系も類似している朝鮮時代後期の漢語教科書『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』『学清』『華音撮要』の四資料を対象に、濃音表記の使用条件を探求することを目的とする。

論文の構成は以下のようになっている。

第1章では、先行研究の全体的な把握を行い、問題点と研究の方向を明確にする。

第2章では、『華音啓蒙諺解』における濃音 sg 及び ss で表記される漢字について、音注のローマ字転写や音韻的地位の整理をした。整理を通じ、一部の漢字が複数の音注を持つことが明らかになった。これらの整理結果を基に、まず音韻の観点から濃音表記が使用される理由を考察する。さらに、本稿は濃音表記の使用が文中の強く読む部分を示す可能性があるという見方を提起し、分析単位を音節から語単位や文単位へ広げ、漢語文における焦点および語重音の観点から濃音で表記される漢字を詳細に考察する。

第3章では、『你呢貴姓』および『学清』の両資料に見られる濃音表記の漢字を考察する。これら二冊は内容が類似しているだけでなく、音韻体系も比較的近いいため、同一章で考察を行う。本章ではまず、音韻の観点から両資料において濃音 sg および ss で表記された漢字の全てのローマ字転写と音韻上の地位を整理・分析する。また、漢語の文や語を単位として、濃音表記の使用と強く読む部分の提示との関係について更に詳しく検討する。

第4章では、『華音撮要』における濃音 sg および ss 表記の漢字について考察する。本

稿で取り上げた朝鮮時代後期の四種の中国語教科書の中で、『華音撮要』の音注表記は最も複雑であり、一部の漢字には最大で5、6種類の異なる表記方式が併存する場合がある。この点について、本稿は複数の書写者によって作成され、音注表記に書写者自身の個人的差異が反映された可能性があると考ええる。

これら濃音 sg および ss で表記された漢字の中には、四資料に共通する漢字も存在する。そのため、第5章では、これら朝鮮時代後期の四資料に共通する濃音表記の漢字を比較、対照して、その使用特徴を明らかにする。また、第5章ではこれら四資料の音韻体系について全体的な把握も行う。

以上、本稿では朝鮮時代後期の四資料に見られる濃音表記 sg および ss について、体系的な整理と分析を行った。第2章から第4章にかけて、各資料における sg および ss の使用状況を検討し、音節での分析にとどまらず、語や文のレベルへと分析を拡張、漢語の語重音規則と合わせて検討した。また、四資料が共通する濃音表記の漢字についても相互に対照しながら分析を行った。全体的に見れば、sg 表記の使用頻度が低い。しかも『華音』において最も安定して用いられる一方、『撮要』では不安定性と書写者間の差異が顕著である。sg は語の重音や文の焦点位置と高い対応関係を示し、特に程度を表す副詞「更」に多用される。ss 表記は主に現代漢語の s、x、sh 声母に対応し、特に『華音』での使用が安定している。また、一部の ss+i 構造は漢語における巻き舌音の現象を反映している。本稿による朝鮮後期漢語資料における濃音記号の整理は現時点で最も体系的かつ包括的であると言える。本研究を通じた詳細な分析が、今後、朝鮮後期資料の漢語音注における濃音表記の徹底的な解明に有益な参考と基盤を提供することが期待される。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第192号	氏 名	魯 静涵
論文題目	朝鮮時代後期中国語教科書のハングル音注における濃音表記sgとssの研究 —『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』『學清』『華音撮要』を対象に—		
(論文審査概要) 本論文は、19世紀末の朝鮮半島で編纂され、用いられていた4種の中国語会話書『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』『學清』『華音撮要』の中で中国語の発音を表記するために用いられたハングルを分析の対象とし、これらの資料に共通して用いられた「濃音」と呼ばれる朝鮮語特有の子音による表記(音節初頭位置のsg-及びss-)に着目して、その使用条件を解明しようとしたものである。 論文は全体で6つの章から成る。 第1章は序論である。研究の背景・対象・目的の説明及び使用した文献資料の解題が行われ、先行研究がまとめられている。 第2章から第4章までは、資料とした会話書のハングル音注に現れる濃音表記sg- ss-それぞれが用いられた漢字の用例を抽出して、なぜその語に濃音表記が用いられているかという視点から検討している。具体的には、中古中国語における音素のカテゴリー、文中での焦点、語の“重音”(概略、一般言語学に言うストレスアクセントにあたる)に着目して、濃音表記との関係について論じている。 第2章では、『華音啓蒙諺解』が扱われ、sg-については、中国語韻母との関係についての先行研究の指摘が必ずしも当てはまらないこと、文の焦点に関しては濃音表記と一定の関係が認められるが決定的要因ではないこと、一方、重音とは関連が明瞭であることなどが結論された。ss-については、声母や韻母などの分節音素や文の焦点との関係はさほど明瞭でないが、語の重音とは関連が深いことが示された。 第3章では、互いに内容上の関連性の深い『你呢貴姓』と『學清』が共に扱われている。sg-については、その使用が文の焦点の要因と一定の関連性を持ち、語の重音との関係も認められることが示された。ss-については、『學清』は『你呢貴姓』と比べて濃音表記の例が少ないこと、一部のss-表記は中国語のそり舌音を表そうとした可能性があることが指摘されている。また、両資料において、sg- ss-ともに使用が不安定であることにも言及されている。 第4章では、『華音撮要』が扱われている。sg-については、全体的にあまり顕著な使用傾向が見いだせなかったとし、一方ss-については、語重音のある位置に用いられるという明確な対応関係が見られたとしている。文献としての『華音撮要』は3つの異なる部分から成っており、音注を含むのはそのうちの第1と第3の部分であるが、濃音表記の現れが第1部分と第3部分とで異なっていること(第3部分は濃音の使用が少ないこと)が示された。全体として『華音撮要』は音注の表記揺れが大きく、複数の書写者が関わっているという推測がなされている。 第5章では、以上に検討された4つの資料において記述されている中国語の言語的基盤は主として当時の北京語であるとし、続いて複数の資料に共通してsg- ss-の表記が現れる漢字を取り上げ、濃音表記が採用された理由を考察している。その上で、朝鮮時代の後期の資料になって現れてくる濃音表記の性質について、中国語の音韻体系の中にその使用の根拠が見いだせないことから、現実の中国語の音声や音韻の反映というよりは、朝鮮語を母語とする編纂者が、第2言語としての中国語を習得する過程において、母語の影響を受けて形成した過渡的な言語(論文中では「中間言語」と称している)の反映であると結論した。 第6章は全体の結論として、資料中に現れるsg-とss-に関する考察の総括を行うとともに、今後の課題として、今回対象に含めなかった『華音啓蒙諺解』の付録部分の音注の解明、表記揺れの成因の更なる分析、また4種の資料が共通して参考した先行の会話書が想定されることから、より古い年代に成立した朝鮮資料の探索が挙げられている。また、19世紀末における朝鮮と中国との関係の変動など社会情勢の要因が朝鮮半島における中国語学習にどのような影響を及ぼしたかも、今後検討すべき課題であるとしている。 なお付録として、東京大学文学部小倉文庫所蔵『華音撮要』の書影9葉(白黒)、4資料に出現するss表記を含む漢字の文焦点を示す例文の一覧、及び4資料の漢字とハングル音注の対照表(同音字表)を			

第6章は全体の結論として、資料中に現れる sg- と ss- に関する考察の総括を行うとともに、今後の課題として、今回対象に含めなかった『華音啓蒙諺解』の付録部分の音注の解明、表記揺れの成因の更なる分析、また4種の資料が共通して参考した先行の会話書が想定されることから、より古い年代に成立した朝鮮資料の探索が挙げられている。また、19世紀末における朝鮮と中国との関係の変動など社会情勢の要因が朝鮮半島における中国語学習にどのような影響を及ぼしたかも、今後検討すべき課題であるとしている。

なお付録として、東京大学文学部小倉文庫所蔵『華音撮要』の書影9葉(白黒)、4資料に出現する ss 表記を含む漢字の文焦点を示す例文の一覧、及び4資料の漢字とハングル音注の対照表(同音字表)を掲げている。

審査委員会は、上論文につき審査した結果、次の評価を与えることとした。

1. 創造性の点においては、優れている。

19世紀末の朝鮮の中国語会話書群は、以前からその存在は知られていたものの、その音韻を真正面から分析の対象とした先行研究は少ない。そのため、本研究は、資料の選択自体に新規性があると言える。Selinker の中間言語の理論と本論文の議論との関係にいささか不明の点もあるが、全体に日中両国や一部韓国の研究もよく渉猟した上で、濃音表記研究の手薄な点や問題の在りかを的確に見いだしている。分析に際し、音節単位に対応のみならず、語の内部、ないしは文全体のストレスの配分状況が濃音表記といかなる関係をもつかを探索している点が特に斬新である。更に、濃音の使用を第二言語習得という一種の言語接触の問題と結びつけて論じている点も有意義であって、今後の朝鮮資料に対する中国語学的研究に新しい方向性を与えると考える。

2. 論理性の点においては、優れている。

本論というべき第2章から第4章において、極めて一貫した手順に基づいて分析が進められている。結論については、仮説に合わない個別事例の説明にやや明確性を欠く部分があり、結論を急ぎ過ぎている印象もあるが、全体の論旨を損なうほどの問題はないと思われる。日本語表現の論理性も水準に達している。

3. 厳格性の点においては、優れている。

上記1. にも述べたように、先行研究の渉猟咀嚼は十分である。研究データ収集の基礎作業として、もとの文献において印刷あるいは手書きされたハングルを判別してローマ字に転写する必要があるが、誤りが非常に少ない。一方で、文献資料の取り扱いに関しては、墨書の読み誤りや、書誌学的知識の不足も見られたが、これも全体の論旨を損なうものではない。

4. 発展性の点においては、優れている。

朝鮮資料中の濃音は、先行研究において、中国語の特定の子音音素とは直接対応しないものとして等閑視されがちであった。本論文はそこに取えて問題を見いだし、その使用条件について、真摯に分析を行い、完全な解決とは行かずとも、文の焦点や感情的強調との関係、及び朝鮮語の音韻体系の背景など、今後の音声的対訳資料研究や言語接触学の研究の発展に貢献しうるいくつかの重要な論点を明らかにした。この点は高く評価できる。

以上から、本論文は、全体的に、優れている。

論文審査結果	
◎・否	

審査委員 主 査 (氏 名) 更科 慎一

(氏 名) 森野 正弘

(氏 名) 尾崎 千佳

(氏 名) 上田 由紀子

(氏 名) _____ 印